

。おそろいのセーターにそでを通し迎えた冬。仕事を終えてバイクで走ってくる彼を今か今かと待っている。二人で食べるあなご寿司や満員電車に乗っていく風呂屋……。そんな何気ない二人で過ごす日常に幸せを感じている。

そんなある日、海が見たくなって彼と一緒にロマンスカーに乗り江ノ島に向かう。フリスビーをキャッチしたときの確かな感触を二人の間に感じることはできないけれど、彼の「嫁さんになれよ。」の一言が、私を安心させる。真夜中に家に帰るまで二人の時間を楽しんだ。

しかし、二人の間に気まずい空気が漂い始める。一＋一が二となる変化のない毎日に加え、なかなか彼が私のことをかまってくれない。しかも彼の生活の影には部つんじょせいの姿が……。朝まで待つても帰ってこない彼の行動がそれを物語っている。

日々を重ねるごとに募っていく不安。しかし、それを認めたくない私は、彼を問いつめるのではなくいつもの話をしていたいと思っている。

。あなたと会ったその日から、私たちの恋が始まった。それが私たちの『サラダ記念日』。あなたの存在がこの冬の寒さを和らげてくれる。ある日皮ジャンを着たあなたはバイクに私を乗せてくれたね。300円のあなご寿司でもあなたと食べるとおいしい。こんなささいなことでもあなたといることが最高の幸せ。どうしても海が見たくて二人で江ノ島に行ったね。潮風を感じながらプロポーズ。砂浜を歩きながらの口づけ。

あなたと過ごした500日。

あなたの髪をとかしたブラシ使うとき、ぐっとあなたを感じるの。ずっと一緒にいたいと思う毎日。でも、それもつかの間の幸せだった。バレンタイン。あなたに会えないこの寂しさを私はどうやって埋めればいいの？そして3月。たった一つの言葉を言えない。しかし、その時が来てしまった。あなたと過ごした日々が走馬燈のようにかけめぐる……。そして二人はそれぞれの春を迎える。

。秋から冬に変わる頃、土曜日の夜、彼の家に泊まりに行った。その翌日の朝、私は彼のためにゆで卵を作ってあげた。その帰り際に、彼から感情のこもっていない言葉を言われて泣いてしまった。けれど、「いつもきれいでいる」と言われているので泣き顔を鏡で見て、きれいかどうか確かめている時、さっきの言葉が気にかかりまた泣いてしまった。次のデートの時、海が見たくて車に乗って江ノ島に遊びに行ってもまちちゃんと呼んでくれない彼が呼んでくれた。その新鮮さが私はとても好きである。海の家でカンチューハイを飲んでるとき「嫁になれ」と言われた。そして午後5時くらいに、砂浜を歩いていると、いい雰囲気になりキスをした。それが富士山に見られているように感じた。海から帰るとき砂浜に二人で埋めに飛行機の翼をずっと忘れないのに、「30まで結婚しない」と言っている。その言葉を聞いたとき、この部屋で私とはちがう女の人と暮らしていたことが気にかかった。私は彼との生活を続けたかったし、他愛のないことでも会話をしていたかった。私だけを思っていてと望んでいたけれど、一人の女の人だけを見ているというのは男にとってつまらないものだともわかっていった。彼の気持が私にはもうないと分かったとき、私は愛だけでは人は生きていけないんだと思った。最後に横浜の中華街に行ったとき、もうこれで終わりなんだと思った。

。冬の始め11月の日曜の朝、鏡で自分の顔を確かめてみた。男は女の顔が全てで言葉には愛がない。皮ジャンを着た男を夕方まで待っている。「信じることなく愛する」と書かれた手紙に破れそうなほど何度も線を引いた。三百円のやすいあなご寿司でも二人で食べるとおいしく感じる。満員電車の中で産毛まで見えるほど近い、それは心まで近くに感じた。風呂はいつも銭湯で帰ってきたら二人で一緒にうがいをする。12月に海が見たくて車で江ノ島に行った。これからも二人はずっと一緒に写真なんかとらなくてもこれからたくさんとれると思ってとらなかった。海で石投げをして女のために男は生ガキを素手であけた。男は安定した生活を望んでいない。まちちゃんと呼ばれて、抱き寄せられて貝殻のように重なった。酔ったいきおいで「嫁さんになれよ」なんて簡単に言わないで。膝枕で寝息をたてている男は、まだ子どもの考えを持っている。その日の夕方5時半、口づけを……。

。11月の始めに二人が出会い、彼のあたたかい心に抱かれて、泊まる日、二人の愛を確かめる。朝になり、彼が目覚めると出窓から光が射し込みネーブルの香りが優しくにおい、彼女は朝食を愛情を込めて彼のために作っている。何日か後に二人の愛を確かめ合う日がやってきた。彼女は会えないことに寂しくなり、彼に一本の電話をかけるがつかない。もう一度かけ直し彼の声を聞いたとたん涙があふれ今まで思っていたことを打ち明ける。彼もまた自分の気持ちを打ち明けた。二人は愛を確かめ合った。彼女にとつて傷つけられる言葉や悲しむ言葉は彼からの「愛している」という言葉よりも気になり、不安になる。包み込まれるような真つ赤な夕焼け、彼を思う彼女の心が燃え上がる。そして二人は一夜をすごす。彼への思いは他の誰よりも強い。彼女と一緒に食べているだけで300円のあなご寿司でもすごくおいしく感じる。帰り彼と二人で満員電車に乗って彼に守られ産毛も見えほど近づいて彼の顔を見た。その夜、彼と二人で風呂屋に行った。12月に二人でロマンスカーに乗り海を見に行った。江ノ島で一日中二人で遊ぶ。これからの二人の関係が続いていくので写真は取らないでおく。フリスビーで遊ぶ。私のことをまちちゃんと呼ぶ彼の一瞬のためらいが好き。彼の愛が受けとめられないほどいっぱいある感じた帰り道。時刻は12時になっていた。彼女は彼をずっと待っていたが朝になっても帰ってこなかった。

。10月ぐらいいからつきあい始めた二人、泊まった翌朝朝食を作りながら前に言われたきつい言葉が気になった。ある日二人で乗った満員電車で彼が自分を守ってくれたことにうれしく思った。12月ロマンスカーに乗って海を見に江ノ島に遊びに行ったのに写真も取らず自分の気持ちの一方通行の片思いの気分を味わった。海に石投げる彼は自分を見なくても自分のために血を滲ませながら生ガキをむいてくれたことに愛を感じた。「まちちゃん」とためらいながら呼び私を抱きしめてくれる彼。前にチューハイを2本飲んで私にプロポーズしながら、私の膝枕で寝てしまった人。砂浜を歩きながらキスする二人を富士山が見ている「冬の家さわってくるね」と歩いて行った彼を見ながら彼の愛を受け止めかねている自分に気づく。彼の使っているブラシで髪をときながら彼の香りがして嬉しくなっている自分。彼を待ちながらなかなか来ないと思い時計とにらめっこ。プロポーズしたくせに30までぶらぶらすよと言った彼。私は自分とは違う人の髪を見つきたいタペ。タクシーが通っていくのを見ながら2人の将来を考えてやっぱり自分ひとりりを思ってくれる男のつまらなさを思っていると「今日で君と出会ってちょうど500日」と言われて驚いた。雪のように寂しさが私の上に降りてくる気がする。これから先は想い出になると気付いてしまった自分。最後かとも思いつたデートの中華街で別れを告げ、ひとりでオムレツを焼きながら会えなかったバレンタインの日を思い出し、日記を見てまた落ち込む自分。サヨナラで始まった3月

のではなくいつもの話をしていたいと思っている。

。グリンのセーターを着て冬になるころ、夕焼けの空に恋いが芽生え、冬でも心はあったかだ。12月恋を確かめ合った江ノ島で安っぽくしてしまったプロポーズ。長針短針重なる時に僕たちもひとつになった。江ノ島で2人で作った思い出を忘れないでね。彼がいなくて彼のことを持ってソワソワしてしまう。「今日は君と出会う500日目」恥ずかしながら君にささやく。これから2カ月たって何もかも思いでと始まる2月。(男がもう好きじゃないと気づく)しかし最後の思い出として横浜中華街へ連れていく。最後のごはんを作り、いままでのたくさん思い出が涙となりオムレツの隠し味となった。たったひとつのことが言えずにたった1カ月。別れを口にしたら3月

。11月ごろ泊まった。日曜日の朝にご飯を作っている。電車に乗って江の島方面に行く。ロマンスカーに乗って江ノ島に行つてフリスビーをして遊ぶ。海に石を投げて遊ぶ。生ガキの空を開けてくれた。約束していた砂のお城は立ててくれなかった。2人でお酒を飲んだ。ひざまくらをした。5時半に口づけをした。海を触りに行った。「嫁さんになれよ」と言ってくれた気持ちを受け入れられなかった。夜12時に帰った。今日のことを忘れないようにと思った。思い出プラス思い出で思い出ばかりが増えていく。だから寂しい。相聞歌に書かれている恋いのうたに自分の気持ちを重ねあわせ身にしみた。夜に髪を溶かしながら思い出す。デートの日は早く起きてしまう。結婚はしないといわれてその人にとって自分の存在はどうなんだろう。過去の女の子が気になる。結婚しないことを確認した。ずっと一緒に仲良くいたくてふつうの話をしていた。自分だけを思っただけだった。男の人の言葉を別れの言葉と直感した。別れを気づくのは女の役目で、愛だけで人は生きていけない。最後のデートはいい思い出にしたい。だんだん別れが近づいてくる。バレンタインは1人で過ごす。日記を閉じて恋も終わりになった

。冬のはじめ、結婚が決まっている人と出会い愛し合ってしまった。泣いているとき、彼に言われた言葉を思い出し、愛を持たないひとつの言葉がなによりも気にかかった。けれど結婚を決まっている人を信じることなく愛することを心に決めた。月に1度か2度ぐらいしか会えない君と一緒に食べたたった300円の穴子寿司でさえも君と食べるによりおいしくてとても幸せを感じそれが恋だと分かった。その帰りの満員電車の中で私を守ってくれる君がいつもより近くにいた。君といるとどんなことをしても女らしくなってしまう。12月、もうすぐ結婚してしまうあなたと最後の思い出を作るためどうしても海が見たくなり、ロマンスカーに乗り江ノ島へ日帰り旅行に行った。お互いの未来があるため写真はとらなかった。あなたと過ごした1つ1つの思い出が写真にはおさめないけれど、心の中で思い出として残っている。「嫁さんになれよ」だなんて言われると私のその気持ちが揺らいでしまう……。まるで子供のように私の膝の上で寝息を立てる君を見ると、このまま2人でいたい。砂浜でキスをした。午後5時半の富士が見ていた。最後に想い出にと君が冬の海をさわりに行った。

。おそろいのセーターにそでを通して迎えた冬。仕事を終えてバイクで走ってくる彼を今か今かと待っている。2人で食べる穴子寿司や満員電車に乗っていく風呂屋……。そんな何気ない2人で過ごす日常に幸せを感じている。そんなある日、海が見たくなって彼と一緒にロマンスカーに乗り江ノ島に向かう。フリスビーをキャッチしたときの確かな感触を2人の間に感じることはできないけれど彼の「嫁さんになれよ」の一言が私を安心させる。真夜中に家に帰るまで2人の時間を楽しんだ。しかし2人の間に気まずい空気が漂い始める1+1が2となる変化のない毎日に加え、なかなか彼が私のことをかまってくれない。しかも彼の生活の陰には別の女性の姿が……。朝まで待っても帰ってこない彼の行動が、それを物語っている。日を重ねることに募っていく不安。しかしそれを認めたくない私は彼を問い詰める

。これは11月から3月までの話だ。彼は、「いつもきれいでいる」と言って部屋を飛び出した。彼女は泣き顔を鏡に映して確かめた。彼がふつうに言った言葉が、彼女には、ひどい言葉に感じた。それでも2人で300円の穴子寿司を食べていると、幸せだった。12月になって急に海が見たくなって、2人でロマンスカーに乗って出かけた。江ノ島に行って遊ぶこの1日を写真に収めようとするけど、それぞれ将来別になるのなら写真はいらぬ。海辺でフリスビーをして遊んでいて、彼からのフリスビーはキヤッチできるけど彼の気持ちはよくわからない。そして昼食に何を食べようかと迷っていると店に新鮮な生ガキを見つけた。彼女は生ガキを食べたかったので、彼が開けてあげた。そんな彼の手には血がにじんでいた。その血をいとしく思った。そして2人は浜辺へ歩いた。そして彼に彼女はだきよせられて2人は貝殻のようになった。そして、彼は彼女に「嫁さんになれよ」といった。そんな大事な言葉を酔った勢いで言っているのかと彼女は思った。そして2人は夜の12時に帰ろうとしたが、彼女の帰る電車がなくて彼の家に泊まることにした。彼女はこの部屋にいて、彼には前、女の人がいたのかなと思つた。月日が流れて500日がたった。だんだん日がたつことに別れを感じた彼女は、4月に分かれることを決めた。彼女は今の2月からの2カ月間を思い出として過ごすとと思った。彼氏もそんな彼女を見て別れを予感した。二人とも別れのことばを言えないでいた。彼の家で野球ゲームをした。ツアーアウト満塁になったとき、彼は自分の人生のように感じた。そして別れを行った。ゲームもスリーアウトで自分の人生も終わつた2人の恋が終わつた。

。僕は彼女と付き合つたのは10月の終わりごろだった。彼女とのいつものデートは江の島で会議はいつも長身短針重なる時刻だった。だが12月の初め彼女とはすでにツアーアウト満塁の人生だった。僕と彼女の人生の一大事であった。その理由はバレンタインに会えないことであつた。僕は落ち込む彼女に熱い口づけをした。そして時が流れ今日で君と出会つてちょうど500日。グリーンのセーターを着てデートに出る。僕たちは初めて江ノ島のデートスポットを出て横浜中華街で揚げパンを買つて食べた。そして家に帰つた。そこで僕はこれからの2カ月のこと何もかも思い出として始まる2月にしようなどといった。そして2人缶チューハイを二本飲み尽くし僕は「嫁さんになれよ」と優しく彼女に言つた。

。今日は彼とまちちゃんと2人でデート。2人は電車で風呂へ向かった。いつ見ても3つ並んで売られている風呂屋の壁の耳かきセットをまちちゃんは見るとに将来の事を思いだしてしまつた。「どうしても海が見たい」とまちちゃんは冬の海が見たく彼に告げた。そして2人はロマンスカーにゆられながら江ノ島に行った。冬の海は寒い。寒いので2人はフリスビーで遊ぶことにした。彼がフリスビーを投げているその姿が、彼の少年のころのように思えた。何故か私も悲しくなつた。そして時間がたち、夕暮れになってきたころ、海の近くにある店に寄つた。2人は生ガキをたのんだ。彼は私のために力キの殻を指で切つてまでして開けてくれた。浜辺にまちちゃんが一人で歩き出し彼がまちちゃんをためらいながら呼び……。

。「いつもきれいでいる」という男の言葉。鏡の前で泣き顔を映しし確かめる私。ふとあのときのことを思い出す。何気ない彼のせりふ。でも他の幾十の言葉とは違う。今もそれが気にかかる。きつと気のせいであることを祈りながら。君と一緒に冬の海を見に行った。2人でロマンスカーにゆられながら。

行き先は江の島。浜辺でフリスビーに興じる。その時ふと思う。君の思いには、このフリスビーをキャッチする確かさが無いと。それを君に言うわけにもいかず、少し悲しくなつた。2人でお酒を飲みながら、当たり障りのない会話。缶チューハイ二本目の時「嫁さんになれよ」君の言葉。酔つた勢い？それともしらふ？それも確かめられずにこたえられなかった。目覚めれば君に会える。四時ふと目を覚まして時計を見て、ときの進むことをうれしく思う。5時半、期待し時計を見て、まだ時計の来ぬことを残念に思う。6時、もう待ちきれず起きてしまふ。

。冬が来ると思い出す。君に抱かれているようなグリーンのセーターを着て迎えた楽しい日々。愛持たぬひとつの言葉が、愛を告げるいくつもの言葉より気になる日もあつた。海が見たくて12月江ノ島に行った。嫁さんになれよって言ってくれたね。そしてキスをした。浜辺に2人で埋めた飛行機の折れた翼を忘れないでね。君を待つて、眠れない夜もあつたよ。30までぶらぶらするよと言つた君を今も忘れられないでいるよ。あなただけに私を見ていてほしかつた。愛だけで人は生きていけないとわかつていながらも……。あなたと別れるまでの2カ月間、思い出を作ろうと必死だった。日記を読み返していたら楽しかつた思い出が頭をめぐつた。たつたひとつの言葉がいえなくて野球ゲームに命中止していたね。あの日、上り下りのエスカレーターで一瞬君に会えてよかつた。つらいことも悲しいこともなく、天に向く電信柱がうらやましかつた。私の青春はブライダルベルという植物そのものだった。

。どうしても海が見たくなつた2人は12月にロマンスカーに乗って江ノ島に行った1日遊んでいて、2人の未来はだんだん見えてきた。まちちゃんと彼が呼んだ。海の潮風の匂いにのせられて抱き寄せられた私は貝殻になつてしまつた。彼は酔つた勢いなのか、本当に考えていたのか分らないが嫁さんになれよといった。砂浜を歩きながら午後5時半に富士が見ている中で口づけをした。彼の気持ちを受け止めかねて24時家に帰つた。それから楽しい時が過ぎていった。そんな彼がある日30までぶらぶらするよといった。私は彼にとってどんな存在なのか不安になった。昔の人が現れたのか。なぜ彼は気持ち揺らいでいるのだろう。ちよつとしたふつうの話をしたいのに、どこか変に意識してしまふ。私だけを愛してくれる人はつまらないと思つていても、私だけを愛してほしいと思つてしまふ。付き合つて1年以上が過ぎた。2月になった彼の様子がおかしいと気づく。このままだとこの愛は終わる。最後のデートだつて思いながら横浜中華街を歩いた。気持ちはつらくても笑つた形の揚げ菓子を買つた。サヨナラに向かつているのがわかる。朝が来るたび涙がこぼれてしまふ。バレンタインですら2人でいられない。初めて口づけをした日ということに気づき、今までが思い出になる哀しさを感じて日記を書いた。サヨナラの月3月。過ぎ去つてゆくものとして抱かれています。心の春がくるとは思っていない。もう終わりだと感じている。たつた一言がいえなくてツアーアウト満塁の野球ゲームをしている。この長い人生の一瞬にでも彼に会えてよかつたと思う。ブライダルベルという名の植物を窓辺につるしこの恋は終わりを告げた。

。付き合つてすぐのある日曜日の朝。2人分の卵を茹でてパンと卵と一緒にテレビを見ながら食べていた。その時ネーブルの良い香りもした。昨日彼が泊まっていたので一緒においしい朝食を楽しく食べた。あくる日泣いていたときいつもきれいでいるといわれてその言葉が愛を告げる言葉より気になつた。それはきつと愛し合っているからかなあ？そうしてずっとラブラブなままどうしても2人で海が見たく12月ロマンスカーに乗って愛を確かめる2人。島について2人は1日それぞれ2人の未来を追いかけて愛を投げ合うフリスビーで遊んでいる。後でまちちゃんのために生ガキをとってきてくれた彼。私の

ためにありがとう。愛を感じます。でもあたらないのかな？少し心配。でもせっかくだからいただきます。そしてその夜２人は缶チューハイを飲みながら結婚しようとする約束し、愛を確かめる。それからキスこのときの永遠の愛を忘れないよう砂浜に思い出を埋めてかえっていった２人。その後どうなるのだろう？それからの２人は１プラス１は２の人生を送り、彼の方が少しマンネリになってきていた。ついに「３０までブラブラするよ」と言って彼女と少しギクシャクして距離が開いてしまっていた。つきあつて５００日たった今、２人はもうさびしさが残っていないようである。そして・・・ついに夢にも見なかったこの日が来てしまった２月。ついに２人の仲はさよならをしまちちゃんはやっぱ愛だけでは生きていけないとつらく悲しい現実を知ってブライダルベールという名の植物を窓辺につるし楽しく幸せだった青春にバイバイしたのだった。

○１１月、少し肌寒く肌寒くなったので、私は彼のセーターを着た。それはまるで彼に抱かれているようだった。でも私は彼の愛もため１つの言葉に傷つけられるときもあったが、どうしても彼と海が見たかったので、１２月、ロマンスカーに乗った。海へ行くなんて何年ぶりだろう。江の島へ着くと今までの嫌なことを忘れるくらい２人で楽しく遊んだ。（この時間が止まってしまえばいいのに）彼が私のために血をにじませながらも生ガキをあけてくれたり、抱き寄せられたりしてすごくうれしかったけど、「嫁さんになれよ」だなんて缶チューハイ二本で言ってしまったていいの。そして江ノ島に２人できた記念として飛行機の折れた翼を込めておいた。「３０までぶらぶらするよ」なんてあの言葉は酔った勢いだったの。気がつけば君と出会って５００日たった。あなたがそんなこと覚えていたなんて。あなたは隠していたかもしれないけれど、私はあなたが旅立つつもりだということに気付いてしまった。これから幸せなはずの２カ月がただの思い出になってしまうのね。できればずっと愛し続けたいけど愛だけではやっていけない。３月になってしまい、お互いさよならがいい出せずに時はたち、彼を迎えた。時がたち、私の青春はこの恋と一緒に終わった。私は彼にもらったブライダルベールを窓辺につるした。

。私が初めて部屋に行った次の朝、早く起きて朝食の準備をしていた。すると、彼が起きて、「おはよう」と言った。その言葉がすごくうれしかった。それから、バイクに乗ってすしやに行つてあなご寿司を食べた。あと、駅まで行つて電車に乗った。その電車は満員で動くこともできなかった。その帰り、風呂屋に行つて耳かきセットを買った。そうしても海が見たくなつたので、電車に乗って江ノ島に行った。二人でフリスビーをしたり、海に石を投げたりした。そして、海辺に座つて生ガキを食べた。そして抱き寄せられ、「嫁さんになれよ」と言った。しかし、酔っぱらつてそんな大切なことを言わないで欲しかったのに。富士山が見える海辺でキスをした。このころから気持ちがずれ始めた。デートも続けたが結局別れてしまった。私の青春期。

。私は彼の家に泊まつていた。今日は12月季節を言う冬だ。外を見ると寒そうな風が吹いている、彼も私と外を見ていた。「寒そうだね」と彼は言う私にグリーンセーターを貸してくれた。私はそのセーターを着るとまるで彼に抱かれているようだった。お昼を食べにすしやにはいる。彼とあなご寿司を食べる。おいしい。彼とこのまま一緒にいられたらなあと思う私。

私はどうしても海が見たくなる。私は彼に連れつて頼む。けれど今は12月だ。彼は一度悩むがOKをしてくれた。二人で海に行くことになった。行き先は江ノ島。私はカメラを持っていたけれど、私たち二人が結婚することになれば毎日のように顔が見れると思ひ写真は取らないことにした。私が彼と少し離れて歩いていると彼が「まちちゃん」とよびかける。その時私は心の中でうれしさを感じ、彼の叫ぶ声に返事を返すのにためらつてしまう。海には潮風が吹いていて、私は少し寒さを感じる。すると、彼はそれに気がついたのか私をぎゅっと抱き寄せてくれた。それでも風は寒かつたけど彼の心は暖かく感じた。彼の服には二本の缶ジュースが入っていた。よく見るとそれはカンチューハイだ。彼は一本を手に取り私に渡す。彼は一口にすると、嫁さんになれよと私に言った。午後5時半、富士山が見えるところで二人はキスをした。彼の部屋にいる私。鏡を見ながら髪をといっていると、彼の香りがした。朝彼の帰りを待っている。彼が早く帰つてこないかなと、待ち遠しくなる。何度も何度も時計を確かめてしまう。この部屋には私がいる前にあの人とどんな女の人が住んでいたのだろうと知りたくなる私。彼に私だけを思っているも、つまらないけれど私だけをずっと思っている欲しい、心の中で自分が反発し合っている。私は愛だけで人は生きていけないということに気がつく。それで彼と話をすると彼は怒ってしまう。自分では最後かも知れない横浜中華街へのデート。そこで笑つた形の揚げ菓子をかう。彼と別れようかと私は思う。そう思つて今までの思い出が心の中にあふれ出す。私は泣きながらオムレツを焼く。バレンタインの日。私は彼にあげようとは思わない。彼を誘ふこともなく一年で一度の一日が過ぎていく。三月彼と別れることを決意する。彼は優しく私を抱きしめる。これで私たちの恋に終わりを告げた。

。あなたからの突然のプレゼント、グリーンのセーターは少しサイズが大きくてあなたに抱かれているようにあたたくてそして優しかった。料理のできない私は卵をゆでるのも真剣で、よくあなたは後ろで笑つた。お金がなくて300円の穴子寿司を二人で食べるとすごくおいしくてこんな小さなことさえも幸せを感じていた。私が海を見たいそんなわがままを言ったとき、あなたは少し考えて江ノ島へ行くかとおつづやいた。フリスビーをしたり砂でお城を作ったり砂浜を歩いたり楽しいときはあざやかに過ぎ

ていく。夕焼けの浜辺を二人で眺めていると少しためらつたようにまちちゃんなんて呼ぶから少しおかしくなつて笑つたら、急に抱き寄せられてまるで貝殻になつたみたいねつていつたら、あなたがくすくす笑い出すから二人で笑つてた。それから二人でお酒を買つておしゃべりをしてたらあなたは少し酔つたみたい。だから膝枕をしてあげると「嫁さんになれよ」私が聞き返すまでもなくあなたは寝息を立ててる。ねえあなたにとつてそんなに簡単なものなの？いつからだろう急に不安を覚えるようになったのは・・・私の心の中では不安は大きく過ぎてゆくのはなぜかしら。もうあえない気がして元気に振る舞いデートをしてもあなたはどこかおかしいの。ご飯に作るオムレツも涙があふれて落ちてゆく。ねえあなたが見えないよ。バレンタインにもあなたに会えないなんてさよならの意味なの？a a ついにあなたは去つてしまふのね。春が来て梅の花が咲いても私の心はカラッポなの。あなたを忘れられる日が来るのでしょうか。4月。やつとあなたのことを思い出に変わることができそうです。あなたとエスカレーターですれ違つたときあなたとの思い出がよみがえつた。楽しかつたこと嬉しかつたこと苦しかつたこと寂しかつたこと。ねえ私あなたと出会えて本当に良かった。

。どうしても海が見たくなつた私を連れ彼は江ノ島へ遊びに行った。二人一緒に未来があれば写真はいい。海に石を投げる彼は私を見ずに冷たい顔をしている。私のために生ガキの殻をあける指は薄く血がにじんでいて、そんな彼が愛しい。彼は波が来ることを信じずに砂のお城を建てた。「まちちゃん」と私を呼ぶとき彼の瞬のたけらぐれが私に好き。抱き寄せられたときに彼についた潮のにおいがした。酔つてしまつた彼は幼い子のように私の膝に頭を置いて「嫁さんになれよ」なんて言つてしまつてそのまま彼は寝息を立てる。帰り道、砂浜を歩きながら口づけをした二人を午後5時半の富士山だけが見ている。「冬の海をさわつてくるね」と歩き出す彼の視線の先には誰もいない広い砂浜。私は彼からの愛を受け止めかねていた。砂浜に二人で埋めた飛行機の折れた翼を忘れないでね。彼と一緒にいたい寂しさが身にしみる12月。「30まではぶらぶら」と言つた彼に私はいつたい何なのでしょうか？彼とはくだらないことでもいいから話していたかつた。私だけを思っているのはつまらないとわかつていても彼にはそれを望んでしまう。さよならに向かつて朝が来ることに・・・。

。肌寒い日曜の朝、いつもきれいでいると言われて泣き顔を鏡で確かめる。君が言つた一つの言葉があれからずっと気になつてた。満員電車の中、私は君に守られていつもより近い君の顔をずっと見ている。

。プロローグ

愛し合う二人、運命のように導かれ、愛を二人ではぐくんてゆく。そして二人は・・・スタートとても寒い冬。私が「さむい」とつぶやいた。すると彼は自分の着ているセーターを脱いで私に着せてくれた。「寒いだろ」彼がつぶやいた。「そんなあなたが体を冷やしてしまうわ」とすると彼は「僕は大丈夫だよ」と言つてくれた。すると私の心はたとえどんなに寒い冬でもぽかぽかする。心は温かい春のように感じ、私にはこの人が必要と感じた。セーターからあなたと同じにおいがした。あなたと一緒に寿司を食べにいった。高級でいいところに入れるほどのお金はなくても有名な高級な寿司屋で食べるよりおいしかった。夏あなたと二人で江ノ島に遊びに行った。「ははは」「ははは」と言う二人の声が幸せそうに砂浜に響いた。これから二人の未来がどうなるかは知らないけれど、二人はその時間を楽しめた。潮の風君のにおいがかかると彼は急に抱きしめてきて二人はその時一対の貝になつた。たつた二本のカンチューハイを飲んだだけで遊び心かどうかはわからないけれど「嫁さんになれよ」なんてボロボ

ーズしてしまうあなたの心を大切にしたい。いっしょに歩いた砂浜で午後5時半になったときあなたと優しく口づけを長くした。「きょうで君と会って500日目だよ」とあなたは言ってくれた。私はもう覚えていないのにあなたは覚えているなんて私はあなたと会えて良かった。もしかしたら私たちは別れてしまうかもしれないと言う心ができてしまった。このようだったらいいなと思つて笑つた顔の形の揚げ菓子を買つた。このような笑顔でいらいたいなと思ひながらあなたと別れてしまふと考えれば自然と涙が出てきてしまふ。でもあなたといっしょに過ごす瞬間はあなたのために涙をこらえてオムレツを作る。エスカレーターで偶然あなたと会えてもうあなたとは終わってしまったけれど、

エピソード

ブライダルベルという植物を窓辺につるして私はあなたとの思い出を胸にこれからの未来を進んでいく

。たつぷりと君に抱かれているようなグリンのセーターを着て冬が始まる。今年の冬はあいつがいるから寒くない。あいつのちょっとした言葉は愛を告げる言葉より気になつてしまふ、今日この頃。あいつは革ジャンで夕焼けの中バイクで迎えに来てお寿司を食べに行くことにした。そこで食べたお寿司は甘くて恋の味をしまった。同じ時間を二人で過ごすことがとても幸せだった。どうしても海が見たくて12月に江ノ島に行った。海に石を投げるあいつは私のことを気にかけてくれないところがどこことなく頼りない。でも私のためにけがをしてまで生ガキをあけてくれるちょっとしたところが嬉しく思えた。

。初めて彼に朝食を作るネーブルにおう日曜日。卵二つ茹でることも真剣勝負。私は朝食の支度を終えて台所を出た。鏡の私はいつの間にか泣いていた。朝食にタマネギを使うんじゃないかった。長ネギにするんだつたと思つた。彼が帰つて彼が言つた言葉を思い出した。「オッハー」いくつもの愛情を表す言葉より気にかかった。それから何日か経て彼の態度が冷たくなり始めて私は少し不安な気持ちを持ち始めた。しかし、彼のことが好きだから彼がいつか私から離れていっても、私は彼を愛そうと思つた。私は彼の秘密を知っている。いつもつけている日記帳の後ろにこう書いてあつた。しばらくして目的地の江ノ島に着いた。江ノ島で一日遊んだ。まさにジュラシックパークのようだった。今度二人できたときは、江ノ島でロストワールドがしたいなと二人で話した。「ままままちゃん」と彼はためらいながら言つた。私は彼が私の名前を呼ぶときの照れたような顔が私はとても好きだった。突然彼が私を抱き寄せた。彼は私の耳元でささやいた。「俺の嫁さんになれよ」彼は少し酔っているようだった。